

長崎大学での WebClass 運用実績について¹

情報メディア基盤センター 丸田 英徳

1 概要

長崎大学情報メディア基盤センターでは、e ラーニング普及のためのコアとして、2006 年度に全学的利用を目的とした LMS として WebClass [1]を導入し、2007 年度より本格的な運用を開始した。講習会などの普及活動の継続により、サービス開始以来、利用授業（コース）数、利用者数ともに増加傾向を維持している。ここでは、これまでの運用実績について、具体的な普及指針・活動とそれともなう利用状況の推移について、統計情報をもとに報告する。また、この期間の運用面での改善点や表出した課題についても述べる。

2 運用指針

e ラーニング普及のための LMS の運用に際し、本学の教員を対象に e ラーニング普及についてのアンケート調査を行ったところ [2]、教員サイドのスキル面の問題が重視され、学生サイドのスキルについては特に問題視されていない結果となった。つまり、学生サイドについては特別な講習などをする必要性はなく、また、教員サイドの LMS 導入とスキルアップにより e ラーニング普及について効果が期待された。

そこで、導入に際しては、特に教職員向けの講習会などを多く企画し、出来るだけたくさんの教職員にハンズオンで講習を受けてもらうことで、LMS 導入を足がかりに e ラーニングの普及を推進することを当面の指針とした。

3 運用実績

3.1 年度別の運用実績

普及の効果の確認のため、2007 年度から 2010 年度までの WebClass 運用実績について年度毎の開設コース数を図 1 に示す。

¹ 本内容の一部は、[5]において発表された。

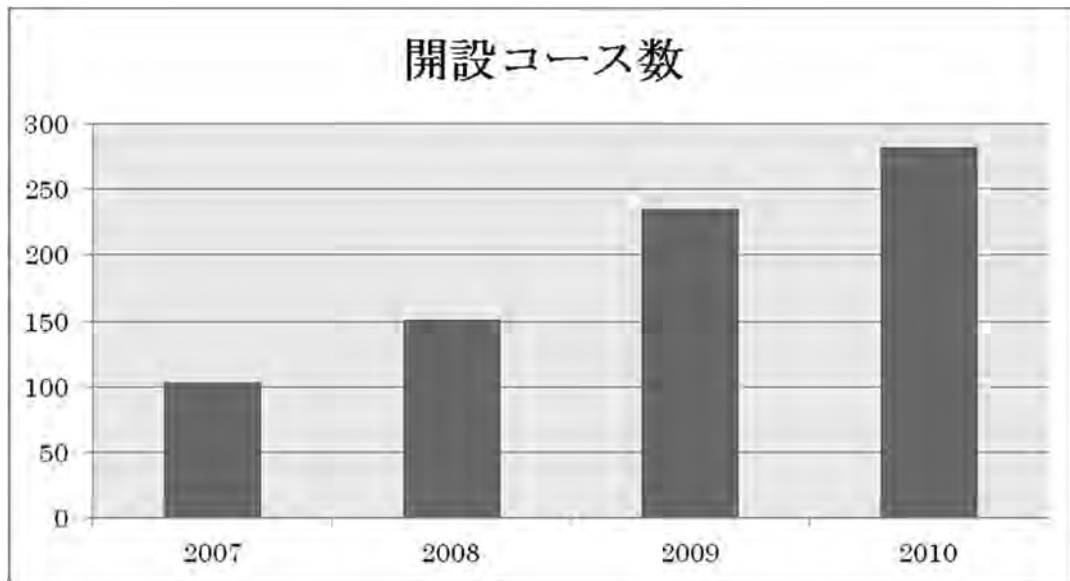


図 1 開設コース数の年度毎の推移

また、コース数と同様に運用実績の指数となる「ユーザ数」「ログイン回数」「ログイン時間」について、教員ユーザと利用（学生）ユーザに分け、それぞれの年度毎に集計した。

A)教員ユーザについて

教員ユーザに関して、WebClass 利用の推移のグラフを図 2 から図 4 に、それぞれの数値を表 1 に示す。

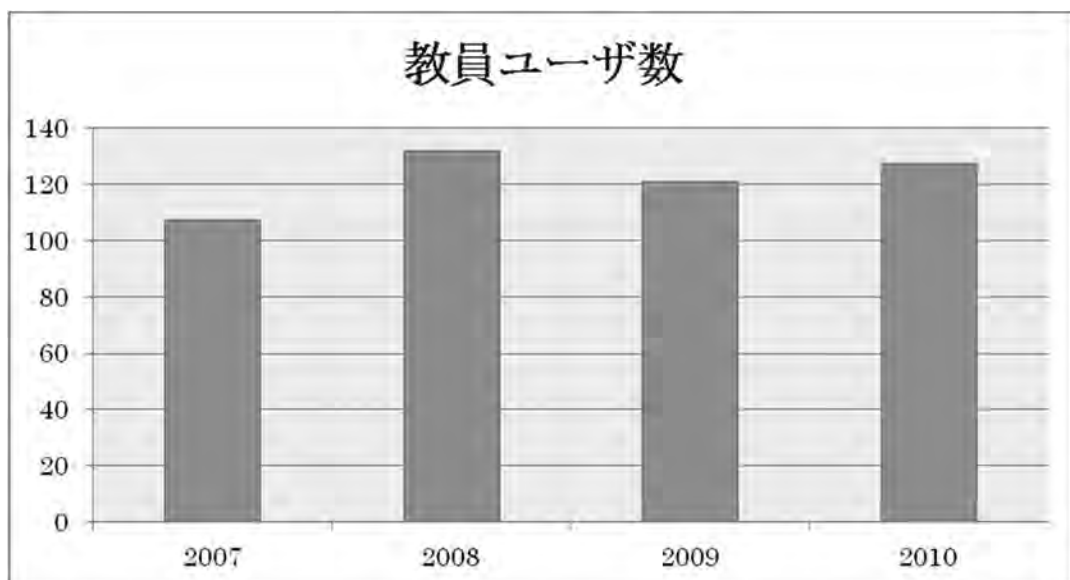


図 2 教員ユーザ数の年度別推移

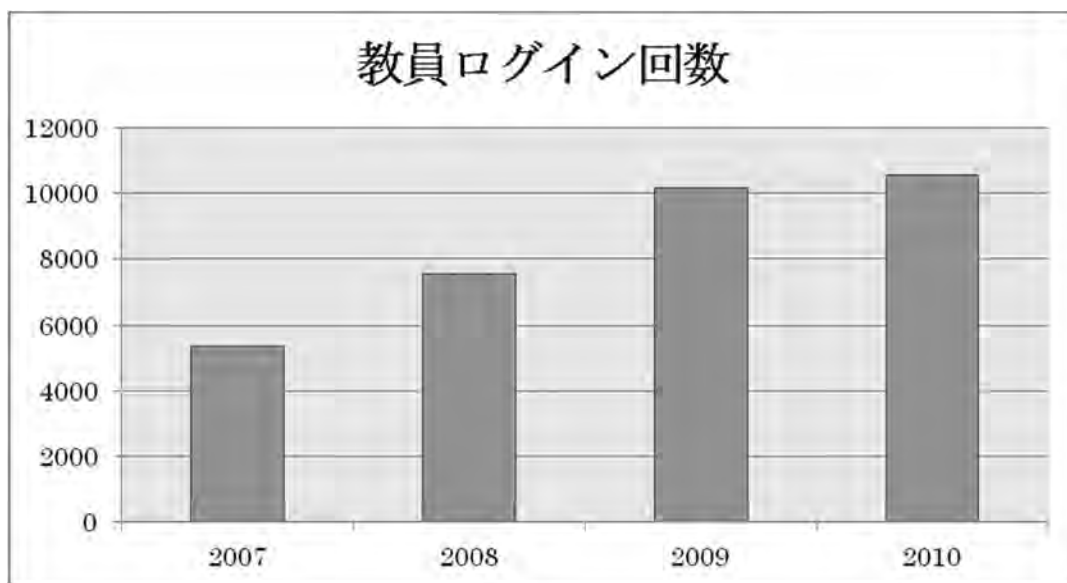


図 3 教員ユーザのログイン回数の年度別推移

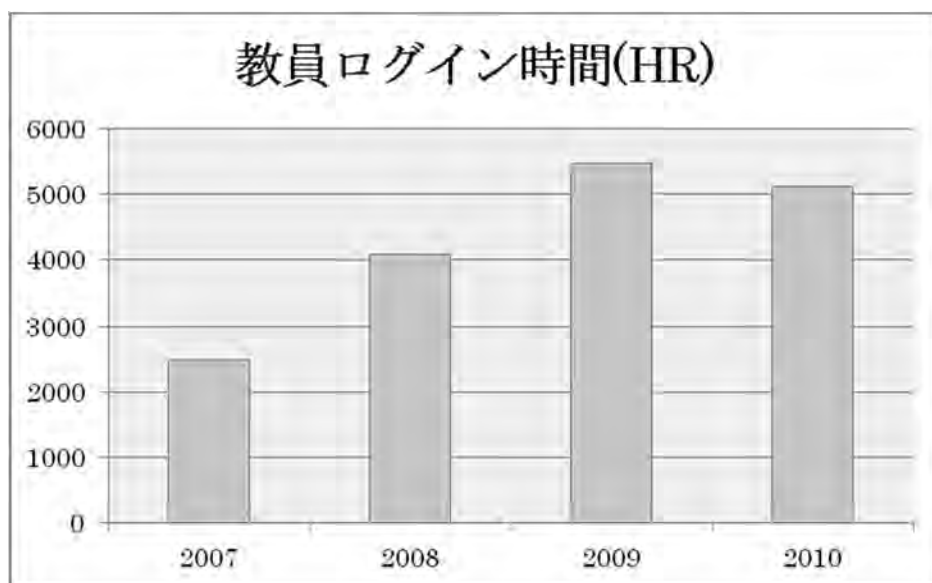


図 4 教員ログイン時間(HR)の推移

表 1 教員ユーザに関する統計情報のまとめ

	教員ユーザ数	教員ログイン回数	教員ログイン時間(HR)
2007	107	5358	2476
2008	132	7545	4090
2009	121	10149	5480
2010	127	10540	5122

これらより、教員の利用者に関しては、その数は2008年度以降ほぼ横ばいとなり、教員の利用の固定化が起こっていると考えられる。また、ログイン時間の減少は、利用者がWebClassの操作方法に慣れてきたためと考えられる。今後、既存の教員利用者に加え、新規利用者への普及が課題といえる。

B)利用ユーザ（主に学生）

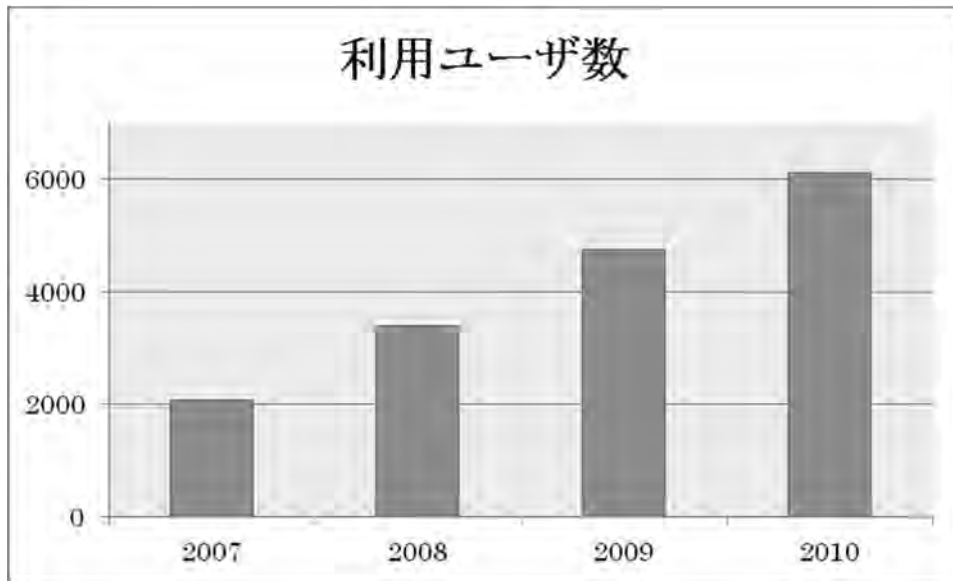


図 5 利用ユーザ数の推移

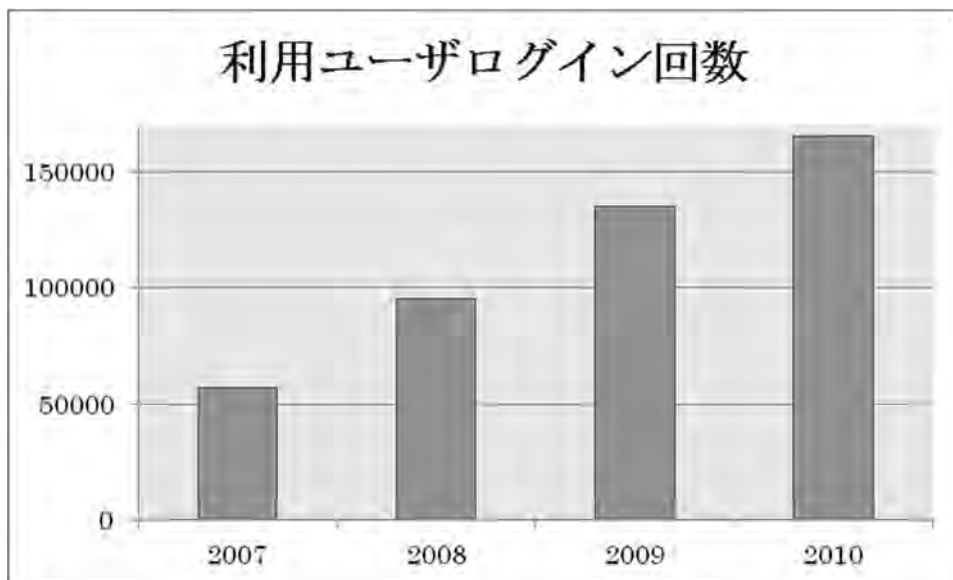


図 6 利用ユーザログイン回数の推移

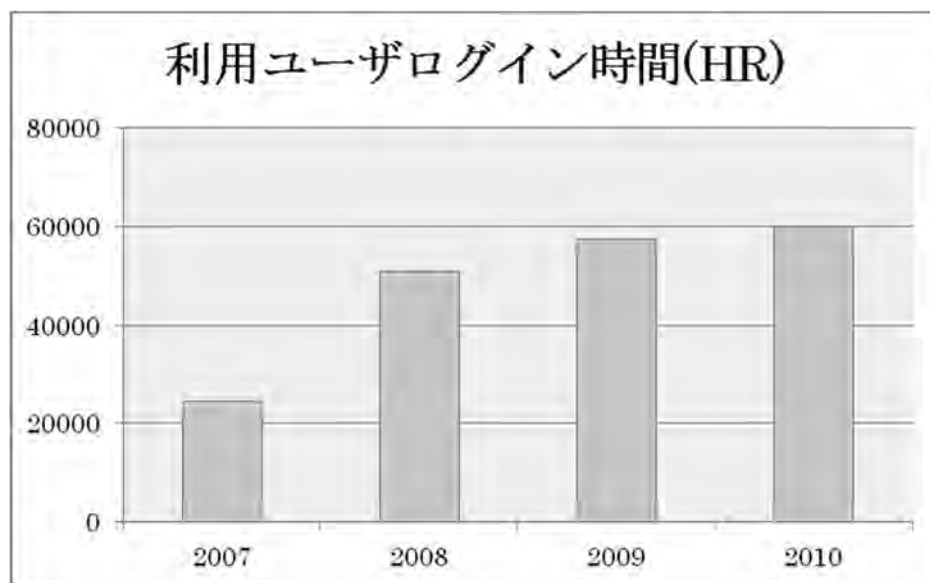


図 7 利用ユーザログイン時間(HR)

表 2 利用ユーザに関する統計情報のまとめ

	利用ユーザ数	利用ユーザログイン回数	利用ユーザログイン時間(HR)
2007	2084	57217	24581
2008	3409	95215	50948
2009	4739	134987	57444
2010	6099	165704	59971

これらより、主に学生を対象とする WebClass 利用者に関しては、その数およびログイン回数は年々増加しており、講義などへの浸透が図られているといえる。また、平均的なログイン時間は、短くなる傾向があるが、これは、講義資料の閲覧などに加え、レポート提出などの短時間で利用が増えており、今後、アクセス傾向の分析が求められる。

3.2 分析

3.1 の推移の結果より、教員ユーザ以外については単調に増加していることが分かる。これらは、教員ユーザがそれぞれ担当する講義について随時 LMS 利用を開始し、教員ユーザ 1 人当たりの LMS 利用度が向上し、結果的に学生の利用度が向上したためと考えられる。一方で、教員ユーザ数は若干ながら減少している。これについては、LMS 利用を開始したものの、継続の利用ができなかったユーザがいたためと考えられる。つまり、事前のアンケート結果からも予測された教員サイドのスキルアップが課題として出ているといえる。教員ユーザの利用の固定化により、さらなる利用率の向上が可能であると考えられる。

3.3 特筆すべき点

LMS の利用について、個々のコースをみた場合、通常想定される利用に加え、ユーザの創意工夫により独自かつ有効に利用しているケースが多くみられた。国家試験対策などの自学自習に特化

したもの [3]や、講義間での連携による効果的な利用 [4]などは、今後の展開について大いに参考になると考えられる。

4 改善点と課題

WebClass の運用開始以降、もっとも大きなシステム改修として、2011年3月に導入された統合認証システムへの対応がある。CAS を用いたシングルサインオンの実現により、WebClass 以外のシステムとのシームレスな認証機構が実現されている。

また、eラーニング普及のための LMS の全学的導入および4年間の運用を通していくつかの課題が明らかになっている。その多くは講義内容や LMS 利用の方法ではなく、システム的な問題である。例えば、時間割・シラバス・履修情報などの学務系システムとの連携によりユーザサイドに負担が少なく、かつセキュアな利用が可能なシステムが求められている。

発展的な課題としては、授業コンテンツなどの深化を目指すユーザへのフォローとして、コンテンツ作成を担当するセクションなどを専門的に設置することが可能であれば、ユーザレベルの底上げにつながると思われる。

参考文献

1. WebClass ホームページ. (オンライン) <http://www.webclass.jp/>.
2. 丸田英徳, 鈴木斉, 黒川不二雄, 西田孝洋, 長崎大学における eラーニングに対する予備調査. 平成 19 年度情報教育研究集会. 2007.
3. 西田孝洋, 丸田英徳, 鈴木斉, 黒川不二雄. 学習者の協働作業による薬剤師国家試験対策コンテンツの作成とその成果. 平成 20 年度情報教育研究集会. 2008.
4. 西田孝洋, 和田光弘, 伊藤潔, 丸田英徳, 鈴木斉, 黒川不二雄. 系統的な情報処理教育による薬物動態の理解向上の試み. IT 活用教育方法研究. 2008. ページ: Vol. 11, p. 1-5.
5. 丸田英徳, 西田孝洋, 鈴木斉, 黒川不二雄. 長崎大学での全学的 LMS 運用実績と課題. 平成 22 年度情報教育研究集会, 2010.